

ごみを見つめて～つくる責任・つかう責任を考える～

原田 修身 (はらだ・おさみ)
(公財) 関西消費者協会 事務局長

ごみの時代は終わらない!?

日本中が祭りに沸き立った1970年の大阪万博。同年、電通PRセンターが発表した「電通PRセンター戦略十訓」は、ものを買わせるための社訓だった。その守るべき教えはこうだ。①もっと使わせる②もっと捨てる③無駄遣いさせる④季節を忘れさせる⑤贈り物をさせる⑥組み合わせで買わせる⑦きっかけを投じる⑧流行遅れにさせる⑨気安く買わせる⑩混乱を作り出せ——である。

戦略十訓の効果はともかく、時代は大量廃棄の時代を迎える。70年、ごみ総排出量(※)は約2800万トンだったが、翌年は一気に4000万トン近くまで伸びた。1人1日当たり排出量(ごみ排出量原単位)では、前者が900グラム超に対し、後者は約1080グラムである。その後、2回のオイルショックやバブル経済など曲折をたどりながらも、85年以降、ごみ総排出量およびごみ排出量原単位は急伸していった。ピークを迎えた2000年度のごみ総排出量は5500万トンであり、ごみ排出量原単位は約1200グラムである。わたしたちは少なくとも半世紀の間、平均1人1日1キロ以上のごみを出し続けてきた。

こんな調子では「ごみ列島」になりかねないと危惧した国は、90年代に環境関連法を整備している。資源有効利用促進法(91年)、容器包装リサイクル法(97年)、家電リサイクル法(98年)、食品リサイクル法(2000年)、循環型社会形成推進基本法(2000年)などである。リサイクルを軸に社会の物質循環の確保や天然資源の消費抑制、環境負荷の低減などの施策を定め推し進めた。

2000年を境にごみ総排出量は減少に転じ、20年度には4167万トンまで減った。とはいうものの、東京ドーム約112杯分の排出量である。

欲張らない生き方

生命誌研究者で理学博士の中村桂子さんは、あるラジオ番組でこう語っていた。「自然界には本来、ごみはないんです。だって落葉がおちたら、わたしたちはごみとおもいますが、地面に入ってもういちど、養分となってもどってくる。水もぐるぐるまわっていますよね。あらゆるものがまわっているんです。循環だからどこにもごみはないんです」。

自然界にごみはない。だけど、人間社会にはごみがあふれている。というか、人がごみを生み出している。この点、冒頭の戦略十訓の教えはまだ息づいている、と思う。しかし、いつまでも欲に踊らされているわけにはいかない。「欲張らない生き方」をしなければ、持続可能な社会は実現しないのだ。

わたしたち一人ひとりがお手本にしたい本がある。『ゼロ・ウェイスト・ホーム ごみを出さないシンプルな暮らし』(ベア・ジョンソン・著/服部雄一郎・訳)だ。すこし紹介しよう。「家庭ごみのカットは、次の5つの簡単なステップを踏めば、実はとてもシンプルです。まず、①リフューズ(不必要なものは断る)、②リデュース(必要なものを減らす)、③リユース(買ったものは繰り返し使う)、④リサイクル(①②③ができないものはリサイクルする)、そして、⑤ロット(残りはすべて堆肥化)。(中略)この『5つのR』をこの順番のとおりに行うと、それだけでごみはほとんどなくなります。最初の2つのRはごみの発生を防ぐもの。3番目のRは『配慮ある消費』、4つ目と5つ目のRは『出しまったごみ』の適切な処理を目指すものです。そして著者は「自分たちの消費の力が地球環境に及ぼす影響を理解すること、そして、その理解の上に立って行動することです」と語っている。

本特集では、長年「ごみを見つめて」きたお二人にお会いした。京都大学大学院准教授の浅利 美鈴さんには、インタビュー形式でごみをめぐる現状と課題について聞いた。また、豊島・不法投棄事件の現場を訪ね、廃棄物対策豊島住民会議事務局長の安岐正三さんに話を伺った。

※『ごみ総排出量』とは廃棄物処理法第5条の2に基づく『廃棄物の減量その他その適正な処理に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るための基本的な方針』における『一般廃棄物の排出量』と同様とする。ごみ総排出量＝計画収集量＋直接搬入量＋集団回収量

出所：環境省「一般廃棄物の排出及び処理状況(令和2年度)について」

